

子どもワークショップ概要

1. ワークショップ開催の目的

中越大震災からの小千谷市の復興は、震災を経験した世代、すなわち震災前後の小千谷を知っている人たちが主役でした。彼らが主体となって、震災前の小千谷を回想しながら「よりよい小千谷」をめざして復興計画を策定し、その計画に基づいて復興の歩みをすすめてきました。しかし将来の小千谷は、この震災を経験していない世代、ずっと復興のプロセスの中で育ってきた世代が担い手の主役となります。そこで中越大震災から10年目にあたり、これら将来の小千谷を担う世代の意見も取り入れて復興の検証をすることを提案し、子供復興ワークショップを開催しました。

ワークショップ参加対象は、小学校高学年。彼らは、復興を進めてきた期間そのものが子供の頃から過ごしてきた日常と重なり、また震災以前の小千谷を知らない世代です。その世代が日々の生活の中で感じてきたこと、中越大震災からの教訓や大人から聞いたこと、東日本大震災の実体験や報道から感じたこと等から将来の災害に備えるために必要なこと、あるいは小千谷がさらに良くなるためのヒントなど、子供たちの思いやアイデアを、未来を担う世代からの提言としてまとめることを目的としました。

2. ワークショップの実施

子供ワークショップは、夏休み期間中の平成25(2013)年8月19日(月)に、小千谷市総合産業会館サンプラザで開催されました。参加者は市内の小学校5-6年生103名で、詳細は以下の表に示すとおりです。参加者は各班6~7名にわかれ、全15班の構成で実施しました。各班には大学生のファシリテータを1~2名配置し、参加者の作業の支援を行いました。

なお、各班の参加者は、基本的にメンバーが初対面になるように構成しました。



内容	詳細
実施日時	2013年8月19日(月)13:30~16:30
場所	小千谷市総合産業会館サンプラザ
参加者	103名(市内小学校5年生・6年生)
引率教員	12名
実施者・ファシリテータ	27名[内訳] 教員8名:同志社大学・常葉大学・ 京都大学・東北大学・ 人と防災未来センター 学生19名:同志社大学、常葉大学
記録	2名(市役所職員)

会場の様子(開会前)と実施概要

表1 子供ワークショップのスケジュール

時間	作業	内容詳細
13:30～13:35	はじめ・あいさつ	ワークショップ開始のあいさつ
13:35～13:40	自己紹介	各班での自己紹介
13:40～13:50	進め方の説明	ワークショップの進め方の説明
13:50～14:30	小千谷の先輩の話	① 関広一氏 ② 新谷梨恵子氏
14:30～14:45	休憩	
14:45～15:15	ワークショップ1	各班での作業(カード書き出し・班内共有・構造化)
15:15～15:30	ワークショップ2	各班での作業(カード3枚を選択・センターテーブルでのまとめ・構造化)
15:30～16:20	ワークショップ3	全員での意見投票
16:20～16:30	まとめ	ワークショップまとめ

ワークショップのスケジュールは表1のとおりです。まず中越大震災における小千谷市の経験を知るために、二人の先輩からお話をうかがいました。一人は、震災発生当時の小千谷市長であった関広一氏、もう一人は市内で農業法人を経営されている新谷利恵子氏です。



関広一氏（左）と新谷利恵子氏（右）の話

次に、二人の先輩の話を聞いて、①大切だと思ったこと、②小千谷の好きなところ、をカードに書き出しました。さらに、自分のカードを読み上げながら、班内で共有しました。これらのカードをファシリテーターの大学生の指導で、構造化してまとめました。



カードへの書き出し（左）とカードの構造化作業（右）

次に、班内で話し合って、各班が代表的な意見のカード3枚を選び、それを一つにまとめる作業をしました。最後に一つにまとめられたカードで、自分が最もよいと思う意見にシールを貼り付けて投票しました。

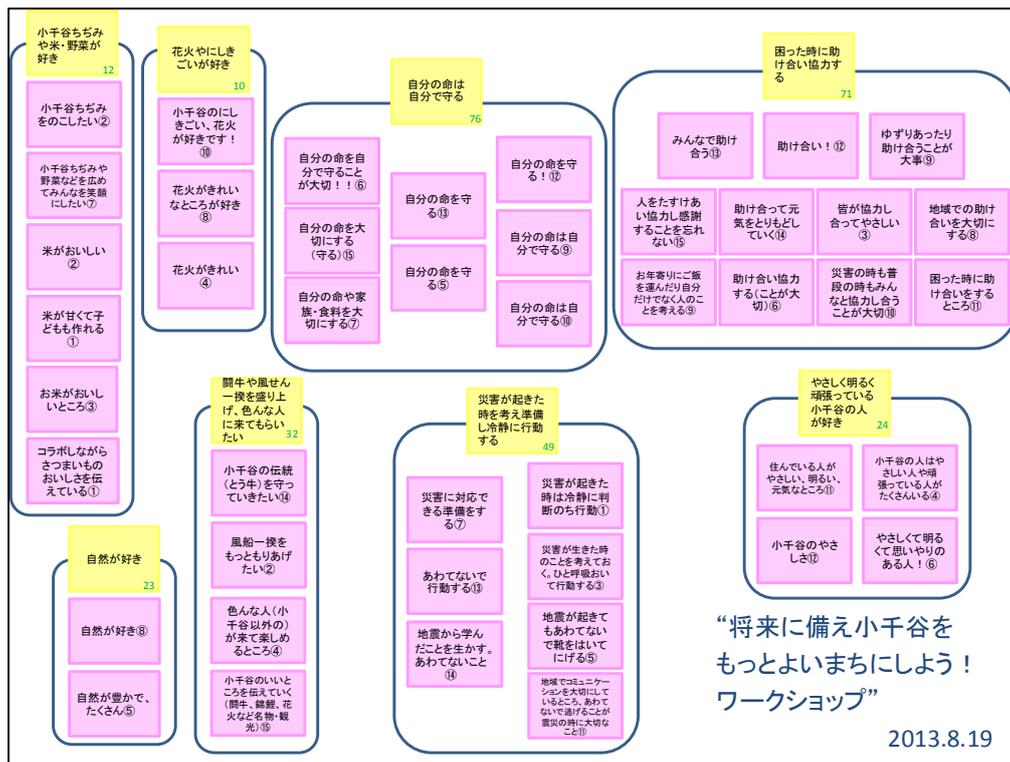


代表的な意見のカードで全体のまとめ（左）と投票結果（右）

3. ワークショップの結果

各班から選定された3枚のカードを全体でまとめたものを図1に示しています。大きく分けて8項目に分類されました。これらをまとめると、将来にわたって「なくしたくないこと、大切にしたいもの」として、小千谷の自然環境や祭りなどのさまざまなイベントなどがあげられています。さらに、やさしくて明るい小千谷の人間関係も、彼らにはかけがえのないものとして映っているようです。

一方、災害への備えについても、多くのことを学んでいました。特に「自分の身は自分で守る」という点や「困ったときの助け合い」は、多くの班からカードが提出されて、投票でも最高の得票数を得ており、大人から子供への震災の教訓の伝承がなされていることがうかがわれました。



ワークショップの結果(全体のまとめ)

4. 復興検証としての子供ワークショップ

復興検証としての子供ワークショップ位置づけは、①震災の教訓は子供たちに伝わっているか、②子供たちは小千谷のどのようなところが好きなのか、という点について情報を得ることにありました。ワークショップの結果から、どちらの点についても積極的に評価できる結果が得られました。震災の教訓については、まず自分の命を自分で守る、災害時の冷静な行動、あるいは他人との協力など、防災に関する基本的な姿勢や「そなえ」の意識への理解が認められます。また、震災前の小千谷を知らない世代にも、小千谷の自然や祭りなど、地域の伝統の良さを感じる心が継承されており、大人の世代との価値観の連続性がうかがわれます。このように小千谷市の復興目標は、子供の世代とも共有可能であり、この目標にしたがって歩んできた小千谷市の復興プロセスは、市民全体に受け入れられるものであったといえる。

